姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第45集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第349次発掘調査報告書―

2017

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代初期に池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守が聳える姫路城が築かれ、その後400年間歴史を刻み続けています。近年は5年を要した保存修理工事が完了し、「白鷺城」と呼ばれるに相応しい白亜の大天守が姿を現したことで話題となりました。

その大天守が聳える姫山の麓に広がる城下町は、三重の堀によって藩の中枢が置かれた内曲輪、武家屋敷が建ち並んだ中曲輪、町人地・寺社地・武家屋敷地などで構成される外曲輪に区画されています。現在、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られ、外曲輪は姫路市の中心として中核市に相応しい街づくりがおこなわれています。

今回報告する姫路城跡第349次調査は、外曲輪南東部の寺地・武家屋敷地であった北条口五丁目41番で実施しました。ここにその成果を報告し、姫路城跡の調査研究の進展に資する所存です。

最後に、事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました合同会社クラウド、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会

教育長　中杉隆夫

例言・凡例

1. 本書は、姫路市北条口五丁目 41 番で実施した姫路城跡第 349 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、合同会社クラウドによる共同住宅の建設に先立って実施した。
3. 発掘調査は合同会社クラウドの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターがおこなった。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5. 土層名は『新版標準土色帳』(1999 年度版）に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、遺構種ごとにつけた。遺構番号は、調査時に使用したものを基本的に踏襲している。遺構種略号は次のように呼称する。

   掘立柱列 :SA　ピット :P　溝 :SD　土坑 :SK　井戸 :SE
7. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々のご援助を頂いた。

   合同会社クラウド　栄伸工業株式会社　安西工業株式会社

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会
　教 育 長　中杉隆夫
　教育次長　八木　優
生涯学習部
　部　　長　植原正則
文化財課
　課　　長　花幡和宏
　課長補佐　大谷輝彦（～平成 28 年 3 月 31 日 係長）
埋蔵文化財センター
　館　　長　秋枝　芳（～平成 28 年 3 月 31 日）
　　前田光則（平成 28 年 4 月 1 日～）
　課長補佐　岡﨑政俊（～平成 28 年 3 月 31 日 係長）

係　　長　森　恒裕
技術主任　小柴治子
　　中川　猛
　　福井　優
　　南　憲和
　　関　梓(～平成 28 年 3 月 31 日 技師)
技　　師　黒田祐介［調査・整理担当］
主　　事　小林啓佑
嘱託職員　黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、
　　田中章子、玉越綾子、野村知子、
　　松田聡子、三輪悠代
整理補助員　寺本祐子、藤村由紀

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過
　第 1 節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第 2 節　調査地の位置と来歴 …… 1

第Ⅱ章　調査の成果
　第 1 節　調査区の基本層序 …… 2
　第 2 節　本発掘調査の成果 …… 2

第Ⅲ章　総括 …… 4

参考文献・図版引用文献 …… 5

図版目次

図版　1　図 1　調査地位置図
図版　2　図 2　絵図からみた調査地の来歴
図版　3　図 3　調査区平・断面図
図版　4　図 4　礎石・列石平・立面図
図版　5　図 5　SA02・08 平・断面図 1
図版　6　図 6　SA02・08 平・断面図 2
図版　7　図 7　SA02・08 平・断面図 3
図版　8　図 8　SD02 断面図　図 9　SD02 出土遺物
図版　9　図 10　SD03 平・断面図　図 11　SK12 断面図
　　図 12　SK11・SK12 出土遺物

写真図版目次

写真図版　1　写真 1：調査区東半全景
写真図版　2　写真 2：調査区西半全景
写真図版　3　写真 3：基本層序　写真 4：列石　写真 5：SA02
　　写真 6：SA02 － P6　写真 7：SA02 － P9　写真 8：SA02 － P10
　　写真 9：SA02 － P12
写真図版　4　写真 10：SA02　写真 11：SA02 東端　写真 12：SA09
　　写真 13：SA08 と SA02　写真 14：SA08 － P2　写真 15：SA08 － P3
　　写真 16：SA08 － P5
写真図版　5　写真 17：SD02　写真 18：SD02 － AA’断面　写真 19：SD02 － BB’断面
　　写真 20：SD03　写真 21：SD03　写真 22：SK12
写真図版　6　写真 23：SK11　写真 24：SE01　写真 25：SE02
　　写真 26：SE02　写真 27：SE03　写真 28：SE03
　　写真 29：SK10 礫出土状況　写真 30：SK10

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯と経過

姫路市北条口五丁目41番において、合同会社クラウドによる共同住宅建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号:020169）に該当している。そのため、平成27年（2015年）10月26日に、幅1m、延長2mの調査区を4箇所設けて確認調査を実施し（調査番号20150317、姫路城跡第346次調査）、近世の遺構・遺物が確認された。そのため、事業者と姫路市教育委員会　生涯学習部　文化財課が協議をおこない、事業者の協力を得て本発掘調査を実施することになった。調査対象は、工事掘削深度が遺構面に達する約219.4㎡である。

事業は2ヵ年計画で、平成27年度事業は発掘調査及び出土品整理、28年度事業は出土品整理及び発掘調査報告書の作成・刊行である。平成27年12月22日に「姫路市北条口五丁目41番の開発に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）に関する協定」、「姫路市北条口五丁目41番の開発に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）（平成27年度）発掘調査委託契約」を締結し、平成27年度事業を開始した。

本発掘調査は平成28年1月15日に着手、2月20日に完了した。調査に係る実働日数は21日である。調査は残土置き場の制約から調査区を東西に分けて実施した。1月15日に東半部の調査に着手、遺構発掘等をおこない、1月22日に全景写真を撮影した。翌日、ピットの掘り下げ、図化等をおこない、東半部の調査を完了した。西半部の調査着手は2月2日である。遺構発掘をおこない、2月17日に全景写真を撮影し、2月19日に図化が完了した。翌2月20日には現地説明会を実施し、調査の全日程を終了した。

平成28年度は7月1日に「姫路市北条口五丁目41番の開発に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）（平成28年度）発掘調査委託契約」を締結し、出土品整理及び発掘調査報告書作成を開始した。平成29年（2017年）3月31日の発掘調査報告書の刊行をもって本事業は終了した。

第2節　調査地の位置と来歴

姫路城は、池田輝政により慶長六年（1601年）から9年の歳月をかけて築かれた平山城である。大天守が聳える姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀がめぐらされ、武家屋敷や町屋などを囲い込む惣構の縄張りが採られている。今回調査を実施した北条口五丁目41番は、大天守から南東約1.3km、外曲輪南東部に位置している。現在知られている絵図によれば、調査地は寺地及び武家屋敷地に該当していることがわかる（図1）。

姫路城に関する絵図は多く残されており、ここではそのうちの6点から調査地の変遷を追っていきたい(図2)。まず、一次榊原時代（1649～1667年）の絵図では、調査地には「龍厳寺」・「徳願寺」の記述があり、寺地であったことがわかる。その後の、二次松平時代(1667～1682年)の絵図では、先述の寺地が武家屋敷地8筆に分割されている。二次本多時代(1682～1704年）では、武家屋敷地の数に変化はみられず、二次松平時代の敷地割が踏襲されているようにみえる。また、二次榊原時代（1711年）の絵図では、再度寺地の表現に変わる。その後の酒井家入封当初（18世紀中頃）の絵図では「龍厳寺」・「得願寺」の記述があり、これが一次榊原時代の寺院名と一致している点が注目される。さらに、18世紀後半の酒井時代の絵図『姫路侍屋敷図』では先述の寺地の大部分が「寺跡」と記され、北と西を走る街路側には「侍屋鋪」「組屋鋪」「年貢地」という表記がなされている。

以上の絵図の内容をまとめると、17世紀後半に寺地から武家屋敷地へ変更され、18世紀前半に再度寺地に戻る。その後、遅くとも18世紀後半には寺院はなくなり、西側と北側を走る街路に沿った一角は寺地から分割される、という変遷を遂げていることがわかる。ただし、参考にした絵図の記載が必ずしも実際の状況を反映しているとは限らない点には注意が必要といえるだろう。

第Ⅱ章　調査の成果

第1節　調査区の基本層序

現地表は、標高約13.3mである。調査区南壁を例にとると、現地表から近現代の盛土や太平洋戦争時の戦災焼土約40㎝、近世の土層約40㎝、城下町築造以前の耕土とみられる灰白色土（以下、中世耕土と呼称）20㎝を経て、地山に至る（図3)。なお、中世耕土が最もよく残っている調査区東半では厚さ40㎝を測り、その上面の標高は12.7mである。地山の標高は調査区東端で12.5m、西端で12.3mと西に向かって傾斜する。また、地山として東端では砂礫層が表出していたが、西にいくにつれて下がり、砂礫層上に黒色粘質土や黄色粘質土が堆積している状況がみられた。これら地山からは、遺物は全く出土していない。

今回、調査区の大部分は地山上面で遺構検出をおこなった。なお、工事掘削深度の制約から部分的に中世耕土が遺構検出面となった箇所もある。後述するように確認した遺構は、中世耕土上面より上から切り込むもののみである。なお、中世耕土には土師器・須恵器細片が包含されていた。

第2節　本発掘調査の成果

今回確認した遺構は、前節で触れたように近世のもののみである。その内容は礎石、列石、掘立柱列、ピット、土坑、溝、井戸がある（図3)。

遺構の配置について、図3-右上では遺構検出面まで達しなかった遺構も含めて青色で表示した。これによって、面的に広がる遺構は西半に多いことがわかる。また土層断面でも西半の遺構の切り合いが激しく、中世耕土の残りが悪い状態が認められ、東半とは様相を異にしている。

以下では、確認した遺構のうち特に重要と考える遺構について触れていきたい。

礎石・列石

調査区西半で確認した（図4)。礎石（A-A’）は東西方向に配置されているとみられ、欠失が多く、建物の構造を明らかにはできなかった。また、これと直交方向に延びる列石（C-C’）がある。この列石の直東には同方向の土管が埋設されていた。これらの上面の標高は12.9mで、近世最終段階のものか、近代のものか判然としない。なお、調査区北端の礎石（B-B’の北側礎石）には被熱痕跡があり、また柱のあたり部分が黒く変色していた。これは、太平洋戦争時の戦災による可能性が高い。

SA02・SA08

SA02は、調査区北端を東西に延びる掘立柱列である（図5・6・7)。確認した柱穴としては16基を数え、未調査部分にさらに延びていると推測される。柱穴の間隔はほぼ一定でおよそ1.3m、掘方は円形で直径約0.5mを測る。深さは遺構検出面から約0.4mであるが、P8・P9・P10の断面からは中世耕土上面から切り込んでいる状況が認められ（写真7・8)、本来の深さは約0.8mに及ぶ。P1・P2は近代の溝とみられる撹乱に切られていたことから残りが極端に悪く、埋土がわずかに残されていたにすぎない。P12の底部に残された柱のあたりから直径20㎝の円柱形の材が用いられたことが判明した。また、P3・P4がSD02の埋土除去後に検出されたため、SD02埋没以前に既に存在していたことがわかる。この状況から、近世でも前半段階の遺構であることが指摘でき、さらに中世耕土上面から切り込んでいることから近世初期の遺構の可能性もある。また、P4以東はP5以西と主軸方向に若干のずれが認められるが、この原因は不明である。遺物は細片ばかりで、時期を特定しうるものはない。

SA08は、SA02に平行して延びる掘立柱列である（図6・7)。5基の柱穴を確認しており、未調査部分にさらに延びて

いると推測される。掘方は円形で直径約0.5mを測る。P3・P4・P5の断面からはこれらが中世耕土上面から切り込んでいることがわかる（写真15・16）。これらの深さは0.8m、柱穴の間隔はほぼ一定で約4.0mである。これはSA02の3間分に相当し、実際SA02の柱穴と対応する位置で検出した。また、埋土の色調もSA02のものと酷似している。出土した遺物は細片ばかりで、時期を特定しうるものはない。

以上のように、検出位置の対応関係等からSA02とSA08は何らかの関係をもった構造物であることが推察される。可能性の1つとして、SA02が塀などの遮蔽物本体を構成し、SA08にはその支えとなる材が据えられるという構造を提示しておきたい。

SA09

SA02の北側約1mに位置し、SA02に平行して延びる掘立柱列である。確認した柱穴は3基で、調査区外にさらに延びていると推測されるが、全体像は不明である。柱穴間の間隔は約1.7m、掘方は円形を呈し、直径約0.4m、深さは1m前後を測る。遺物は出土していない。

SD02

調査区東端で検出した。南北に延びる。埋土がSA02上に堆積していた。幅2.8m前後、深さは約0.6mを測る（図8）。出土遺物としては、土師器皿（糸切底、灯明皿）、肥前系陶器皿（三島手）、肥前系陶器皿（蛇ノ目釉剥ぎ、染付文）、染付磁器杯（一重網目文）、備前焼擂鉢（金グシ様原体による擂目、塗土、重焼きの溶着痕あり）、瓦、相撲を取る猿をモチーフにした土人形などがある（図9）。これらには概ね17世紀後半頃の年代を与えることができるだろう。

SA02直南で立ち上がっていることから、SA02との間に何らかの関係性が推測されるものの、機能時に同時併存していたかは不明である。なお、この遺構は長大な土坑である可能性もある。

SD03

調査区西半で検出した。南北方向に延びる。SK12に切られる遺構で、断面によると幅約2m、深さ約0.9mを測る（図10）。埋土には地山ブロックが多く含まれていることから、人為的に埋め戻されたことがわかる（写真21）。出土遺物は瓦片がわずかにあるだけで、時期を特定しうるものはない。

SD03はSK12より古く、かつSA02のラインを越えて延びる唯一の遺構である。時期は不明であるが、今回検出した中で最古の遺構と考えられる。

SK11・SK12

SK11は、調査区北西端に位置する。調査区外まで広がるため全形は不明だが、現状では東西に長い形状をしていると考えられる。深さは調査区南壁で約0.5mを測る。埋土には土師器皿細片が多数包含されていた。出土遺物としては、土師器皿（糸切底）がある（図12）。

SK12は、SK11の直南で確認した。東西延長5.5m以上、幅1.2m以上を測る細長い土坑である。深さ約1mを測り、断面図からはほぼ垂直に掘り込まれていることがわかる（図11）。埋土には土師器細片が多数包含されていた。出土遺物としては、土師器皿（糸切底）、肥前系陶器皿（砂目）、肥前系磁器皿がある（図12）。

SK11とSK12は、形状が酷似しており、平行しているようにみえる。また、埋土に土師器皿細片が多数含まれている点でも共通しており、関連性が推測される。SK11・SK12の出土遺物には、いずれも17世紀前半の時期を与えることができ、時期的にも近接していることがわかる。また、垂直に掘り込まれた細長い土坑は敷地境際でみつかることが多いため、これらの特徴は遺構の性格を考える上での手掛かりといえるだろう。

SE01

調査区東半、南壁際で検出した。掘方径約2m、石組内径約0.8mを測る。石組は20㎝大の円礫によって構築される。石組内はコンクリートやレンガなどを含む土層が堆積していた。近世に築造された可能性はあるものの、掘方等から遺物が出土していないため、築造時期は不明である。

SE02

調査区中央で検出した。掘方径約1.7m、石組内径約0.8mを測る。石組は20㎝大の円礫によって構築される。石組内は石組に使用されているのと同大の円礫により埋まっており、上部石組を破壊し、それが投棄された可能性が高い。出土遺物には近代の磁器碗が含まれている。近世に築造された可能性はあるものの、掘方等から遺物が出土していないため、築造時期は不明である。

SE03

調査区中央で検出した。掘方径約1.7m、石組内径約0.7mを測る。石組は概ね20㎝大の円礫によって構築されており、石組が掘方の一方の端に寄っている点が特徴的である。石組内は遺構検出面から0.6m掘り下げ、10㎝大の円礫で埋まっている状況を確認した。出土遺物としては染付磁器碗や土師器皿（糸切底）があるが、出土量がわずかであるため時期の特定は困難である。

SK10

調査区西半、南壁際で検出した。直径2.7mを測り、ほぼ垂直に掘られ、検出面から1m以上掘り下げたが底は確認できなかった。また、途中30㎝から40㎝大の円礫が多数確認された（写真29）。これらの状況から、石組が除去された井戸である可能性が考えられる。また埋土には地山ブロックが多数含まれており、人為的に埋め戻されたと考えられる。染付磁器碗や関西系焼締陶器擂鉢などが出土した。これらには概ね18世紀後半以降の時期を与えることができそうである。

第Ⅲ章　総括

第1章 第2節で触れたように、調査地の土地利用には江戸時代を通じて変遷があったことがわかった。本章では、その変遷と今回確認した遺構を関連付けて、評価をおこないたい。なお、出土遺物から時期を特定できないものに関しては、層位関係や検出位置などから時期を推測したものがあり、根拠としては弱いが、ひとまずここでは現時点での最大限の評価・推測をおこない、今後の調査の進展よる再検討に備えたい。

①城下町築造以前か

SD03は17世紀前半頃の遺物が出土したSK12に切られていることから、今回確認した遺構の中で最古の可能性がある。後述するように17世紀中葉の絵図に描かれた寺院の境界と評価したSA02・SA08のラインを越えて延びる遺構で、時期としてはそれより古いと考えられる。池田時代に姫路城の外曲輪がどの程度整備されているかは不明であるが、外曲輪の整備がなされた時期もしくは寺院がここに移転してきた段階で埋められた可能性がある。

②一次榊原時代

SA02・SA08は塀などの遮蔽物を構成する可能性がある。17世紀前半頃の遺物が出土したSK11・SK12が先述のように敷地境際の土坑であるとすれば、この両土坑に接するSA02・SA08を敷地境と評価するのに違和感はない。これが敷地境であれば、龍厳寺と徳願寺との境界、もしくは武家屋敷地間の境界のどちらかに伴うものということになる。SK11・SK12の出土遺物の年代からは、SA02・SA08を一次榊原時代の絵図に描かれた龍厳寺と徳願寺の境界と考える方が年代的な開きは少ないため、ひとまずここでは寺院間の境界として評価しておきたい。

ただし、SA02・SA08は遺物による時期の裏付けができていないことに加え、SK11・SK12の出土遺物が17世紀前半の年代を示しているため、一次榊原時代（1749年入封）より古い時期のものの可能性も残されている。その場合、17世紀前半の調査地を描いた絵図が残念ながら残されていないことから、これ以上の追求は不可能とせざるをえない。

③二次松平時代以降

SD02は武家屋敷地8筆があった区画の東西ほぼ中央に位置していることから、武家屋敷地の背割として機能した可能性がある。SA02直南で立ち上がり途切れるため、②の時期のものの可能性もあるが、出土遺物からは17世紀後半頃の時期を与えることができ、二次松平時代や二次本多時代の絵図等の時期とも概ね整合する。またこのように考えると、SD02がSA02際で途切れるのはこの時期の武家屋敷地の敷地境が以前の寺院の境を踏襲したことによる、という評価も可能かもしれない。

調査区が狭小であったこともあり、遺構の評価が十分にできる状況ではないのに加え、遺物の出土が少ないこともあり、推測も交えて可能性を示した。近隣の調査の進展を待って、今回の調査成果や遺構の評価についても再検討をおこなう必要があり、今度の課題としておきたい。

【参考文献】

大橋康二1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55) ニュー・サイエンス社
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会10周年記念)
乗岡　実2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
姫路市1986『姫路市史』第10巻
姫路市1996『姫路市史』第11巻上
姫路市1999『姫路市史』第11巻下

【図版引用文献】

図1：姫路市2003『姫路城跡（城郭図）』、一部加筆
図2-①：姫路市1986『姫路市史』第10巻　付図2-2
図2-②：姫路市1986『姫路市史』第10巻　付図3-2
図2-③：姫路市1999『姫路市史』第11巻下　付図2-2
図2-④：姫路市1996『姫路市史』第11巻上　付図1-2、一部加筆
図2-⑤：姫路市1996『姫路市史』第11巻上　付図2-2
図2-⑥：姫路市1996『姫路市史』第11巻上　付図3-2、一部加筆

図版1

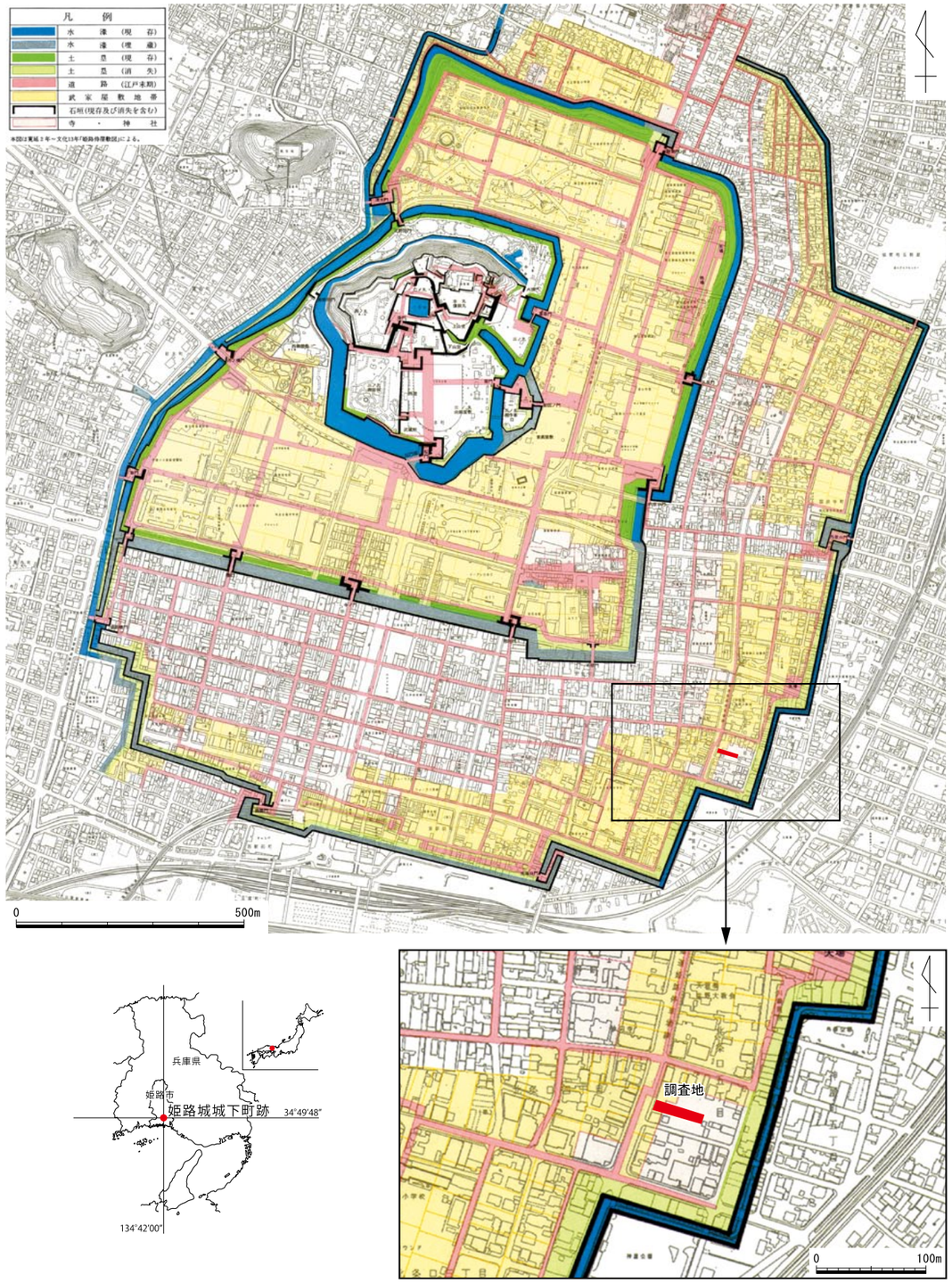
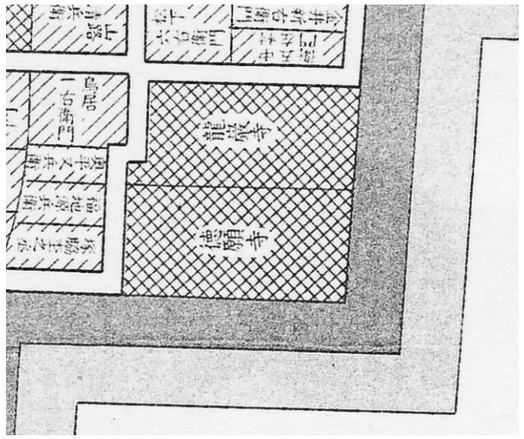
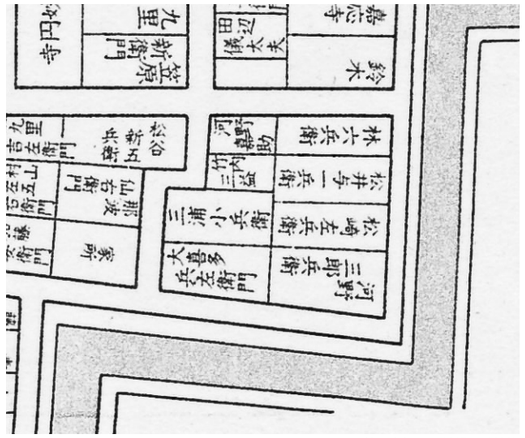


図1　調査地位置図（S=1:12,000、1:5,000）

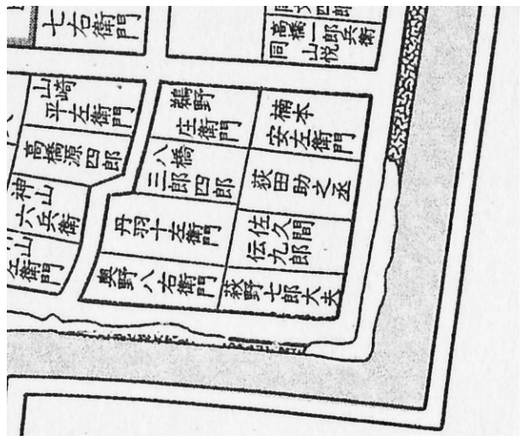
図版 2



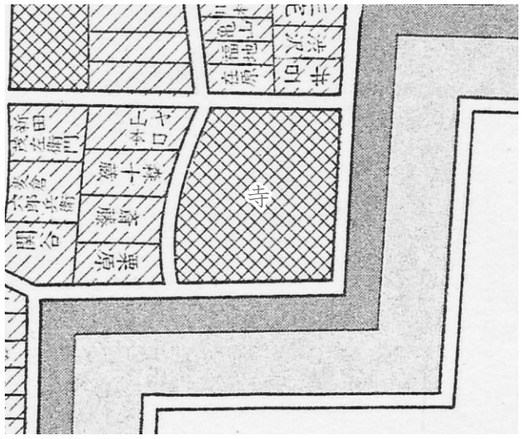
①一次榊原（1649 ～ 1667）



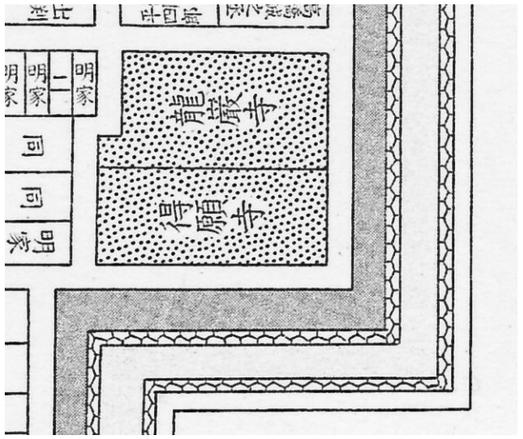
②二次松平（1667 ～ 1682）



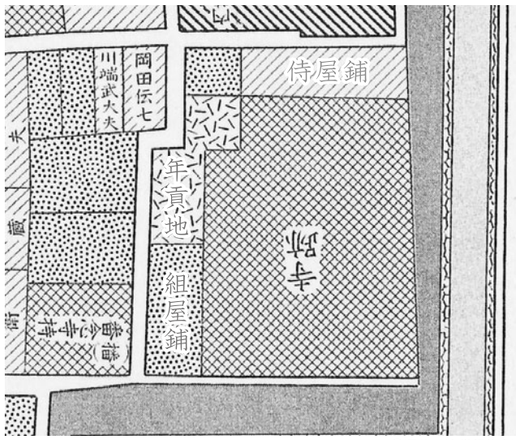
③二次本多（1682 ～ 1704）



④二次榊原（1711）



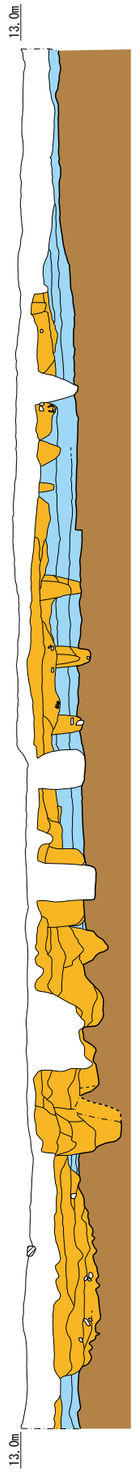
⑤酒井（18 世紀中頃）

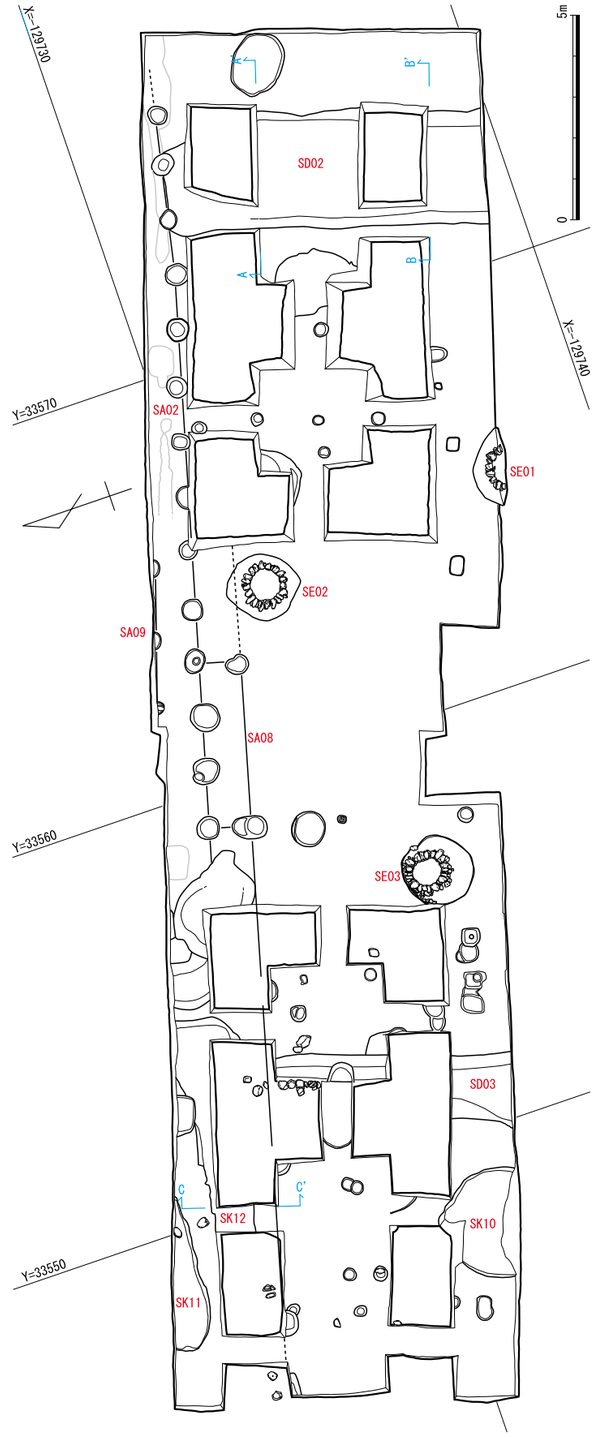


⑥酒井（18 世紀後半）

図2　絵図からみた調査地の来歴

図版 3





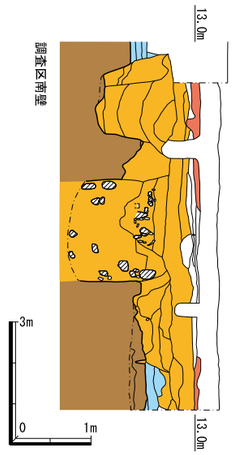
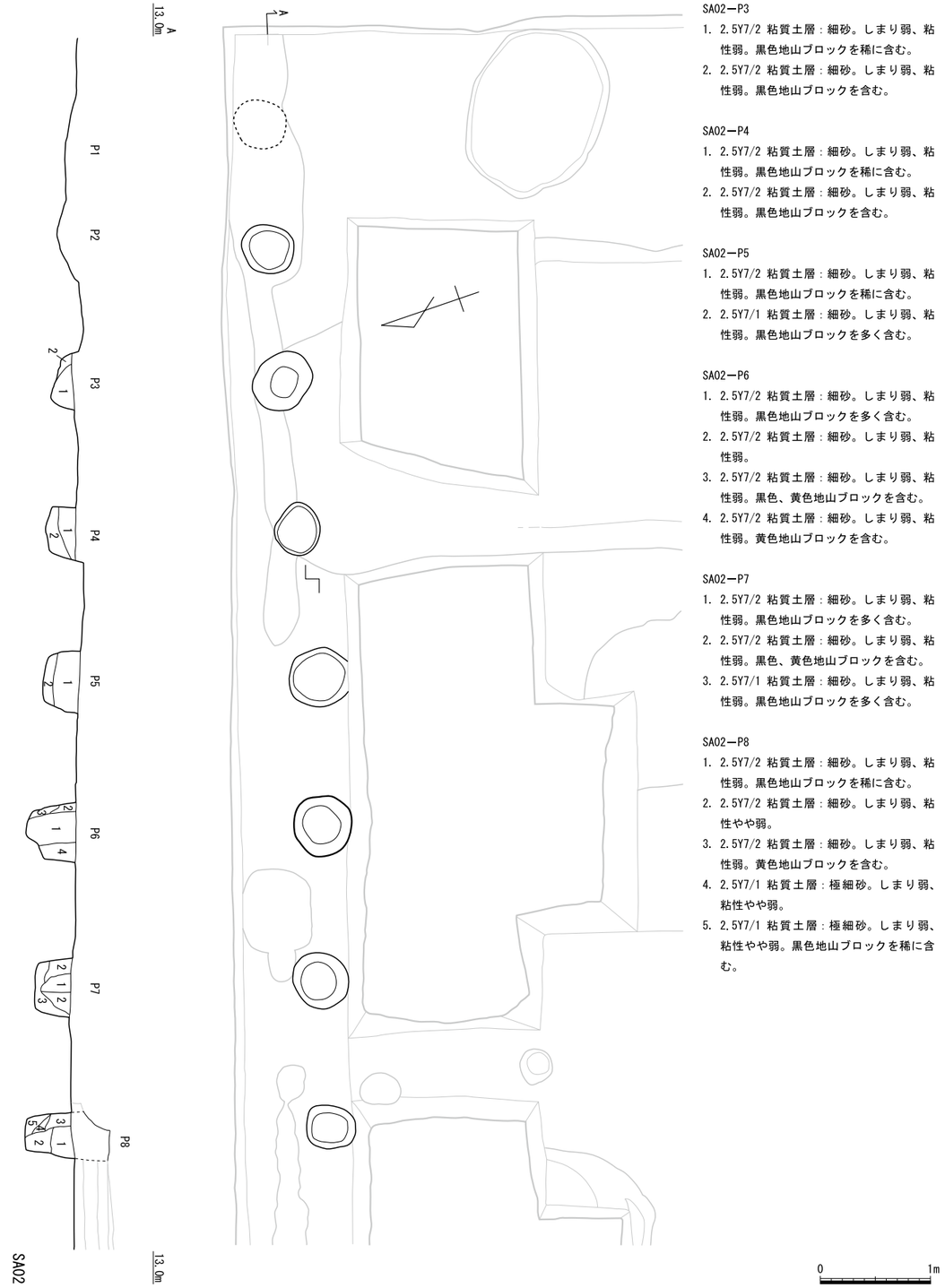


図3　調査区平・断面図（S=1:150、1:75、1:300）

図4　礎石・列石平・立面図（S=1:50）



SA02ーP3
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを含む。

SA02ーP4
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを含む。

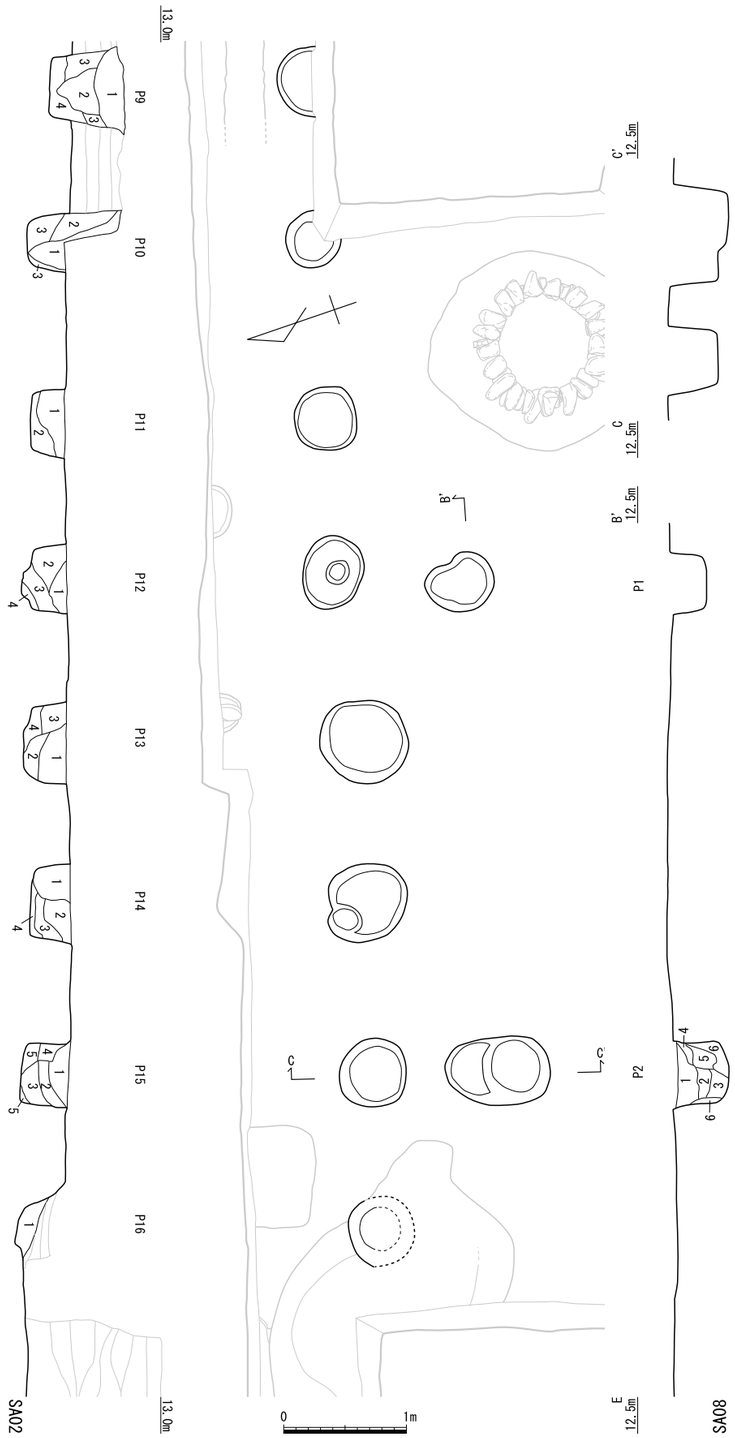
SA02ーP5
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
2. 2.5Y7/1 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを多く含む。

SA02ーP6
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを多く含む。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色、黄色地山ブロックを含む。
4. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黄色地山ブロックを含む。

SA02ーP7
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを多く含む。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色、黄色地山ブロックを含む。
3. 2.5Y7/1 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを多く含む。

SA02ーP8
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。
3. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黄色地山ブロックを含む。
4. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。
5. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを稀に含む。

図5　SA02・08平・断面図1（S=1:50）



SA02ーP9
1. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを含む。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
3. 2.5Y7/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山大ブロックを稀に含む。
4. 2.5Y7/2粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。

SA02ーP10
1. 10YR7/1 粘質土層：細～中砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを多く含む。
2. 2.5Y7/2粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y7/1 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを多く含む。

SA02ーP11
1. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
2. 2.5Y7/1粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを多く含む。

SA02ーP12
1. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
2. 2.5Y7/1粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを多く含む。
3. 2.5Y7/1粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性やや弱。
4. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、粘性やや強。

SA02ーP13
1. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロック、灰色土ブロックを含む。
2. 10YR7/6 粘質土層：シルト。しまりやや弱、粘性やや強。黄色地山主体。黒色地山ブロックも含む。
3. 2.5Y7/2粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを含む。
4. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色、黄色地山ブロックを多く含む。

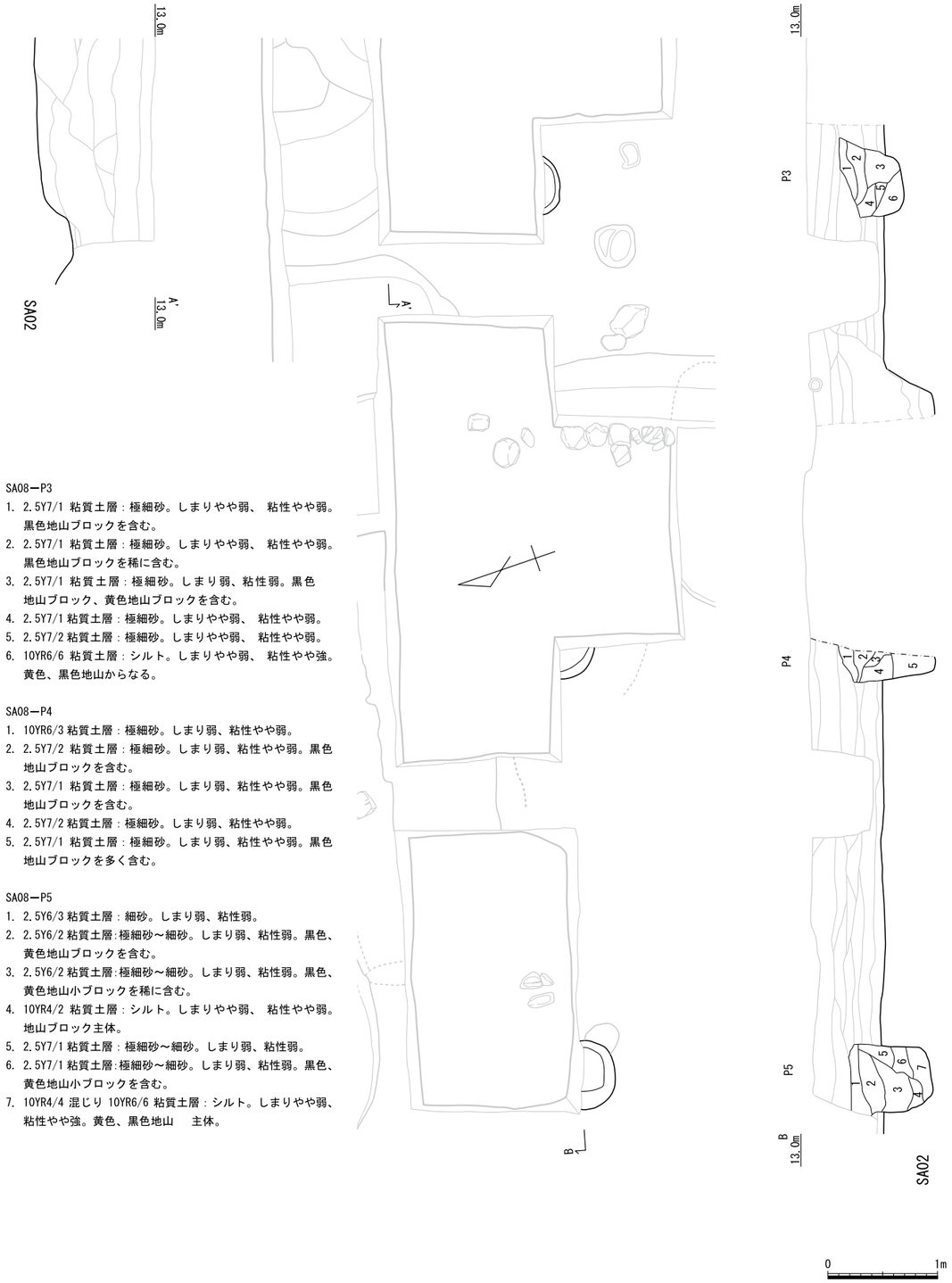
SA02ーP14
1. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロック、灰色土ブロックを含む。
2. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色、黄色地山ブロックを多く含む。
3. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。
4. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色、黄色地山ブロックを多く含む。

SA02ーP15
1. 10YR8/1粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性弱。黒色、黄色地山を含む。
2. 10YR7/6粘質土層:シルト。しまり弱、粘性やや強。黄色地山主体。黒色地山も含む。
3. 2.5YR7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロック、灰色土ブロックを含む。
4. 10YR7/6 粘質土層：シルト。しまりやや弱、粘性やや強。黄色地山ブロックからなる。
5. 2.5YR7/1 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを含む。

SA02ーP16
1. 2.5Y7/1 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを含む。

SA08ーP2
1. 2.5Y7/1 粘質土：極細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロック、黄色地山ブロックを含む。
2. 2.5Y7/4粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性やや強。黄色地山主体。
3. 10YR7/1粘質土層:シルト。しまり弱、粘性やや強。黒色地山ブロックを多く含む。
4. 10YR5/1 粘質土層：シルト。しまりやや弱、粘性やや強。
5. 10YR7/6粘質土層:シルト。しまり弱、粘性やや強。黄色地山主体。
6. 10YR7/1粘質土層:極細砂。しまり弱、粘性やや強。黒色地山ブロックを多く含む。

図6　SA02・08平・断面図2（S=1:50）

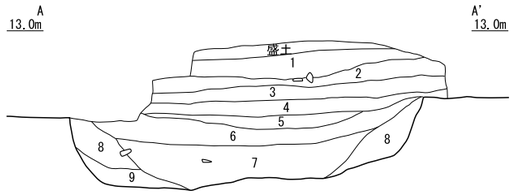


SA08ーP3
1. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、 粘性やや弱。黒色地山ブロックを含む。
2. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、 粘性やや弱。黒色地山ブロックを稀に含む。
3. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロック、黄色地山ブロックを含む。
4. 2.5Y7/1粘質土層：極細砂。しまりやや弱、 粘性やや弱。
5. 2.5Y7/2粘質土層：極細砂。しまりやや弱、 粘性やや弱。
6. 10YR6/6 粘質土層：シルト。しまりやや弱、 粘性やや強。黄色、黒色地山からなる。

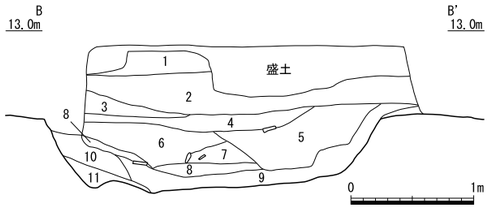
SA08ーP4
1. 10YR6/3粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。
2. 2.5Y7/2 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを含む。
3. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを含む。
4. 2.5Y7/2粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。
5. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを多く含む。

SA08ーP5
1. 2.5Y6/3粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。
2. 2.5Y6/2粘質土層:極細砂～細砂。しまり弱、粘性弱。黒色、黄色地山ブロックを含む。
3. 2.5Y6/2粘質土層:極細砂～細砂。しまり弱、粘性弱。黒色、黄色地山小ブロックを稀に含む。
4. 10YR4/2 粘質土層：シルト。しまりやや弱、 粘性やや弱。地山ブロック主体。
5. 2.5Y7/1粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性弱。
6. 2.5Y7/1粘質土層:極細砂～細砂。しまり弱、粘性弱。黒色、黄色地山小ブロックを含む。
7. 10YR4/4 混じり 10YR6/6 粘質土層：シルト。しまりやや弱、粘性やや強。黄色、黒色地山　主体。

図7　SA02・08平・断面図3（S=1:50）



1. 10YR6/1 粘質土層：細砂～中砂。しまりやや弱、粘性やや弱。炭を含む。
2. 10YR6/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。炭を含む。
3. 10YR5/3 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。5～10cm 大の円礫を稀に含む。
4. 10YR6/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。5～10cm 大の円礫を稀に含む。
5. 2.5Y6/2 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。旧耕土ブロックを含む。この層以下が SD02 の埋土。
6. 2.5Y6/2 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや強。炭を多く含む。
7. 2.5Y5/2粘質土層:シルト～極細砂。しまり弱､粘性やや強｡10cm大の円礫を多く含む。
8. 2.5Y6/3 粘質土層：極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。旧耕土ブロックを含む。
9. 2.5Y6/3 粘質土層:極細砂～細砂。しまり弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを含む。



1. 10YR6/1 粘質土層：細砂～中砂。しまりやや弱、粘性やや弱。炭を含む。
2. 2.5Y5/2 粘質土層：中砂。しまり弱、粘性やや弱。
3. 2.5Y5/3 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。
4. 2.5Y5/3 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。旧耕土ブロックを含む。この層以下が SD02 の埋土。
5. 2.5Y6/2 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性やや弱。炭を含む。
6. 2.5Y5/2 粘質土層：中砂。しまり弱、粘性弱。5～10cm 大の円礫を多く含む。
7. 2.5Y6/3 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや強。
8. 2.5Y6/2 粘質土層：極細砂。しまり弱、粘性やや強。
9. 2.5Y6/2 粘質土層：シルト。しまり弱、粘性やや強。
10. 2.5Y7/1 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。
11. 2.5Y7/1 粘質土層：細砂。しまり弱、粘性弱。黒色地山ブロックを含む。

図8　SD02断面図（S=1:50）

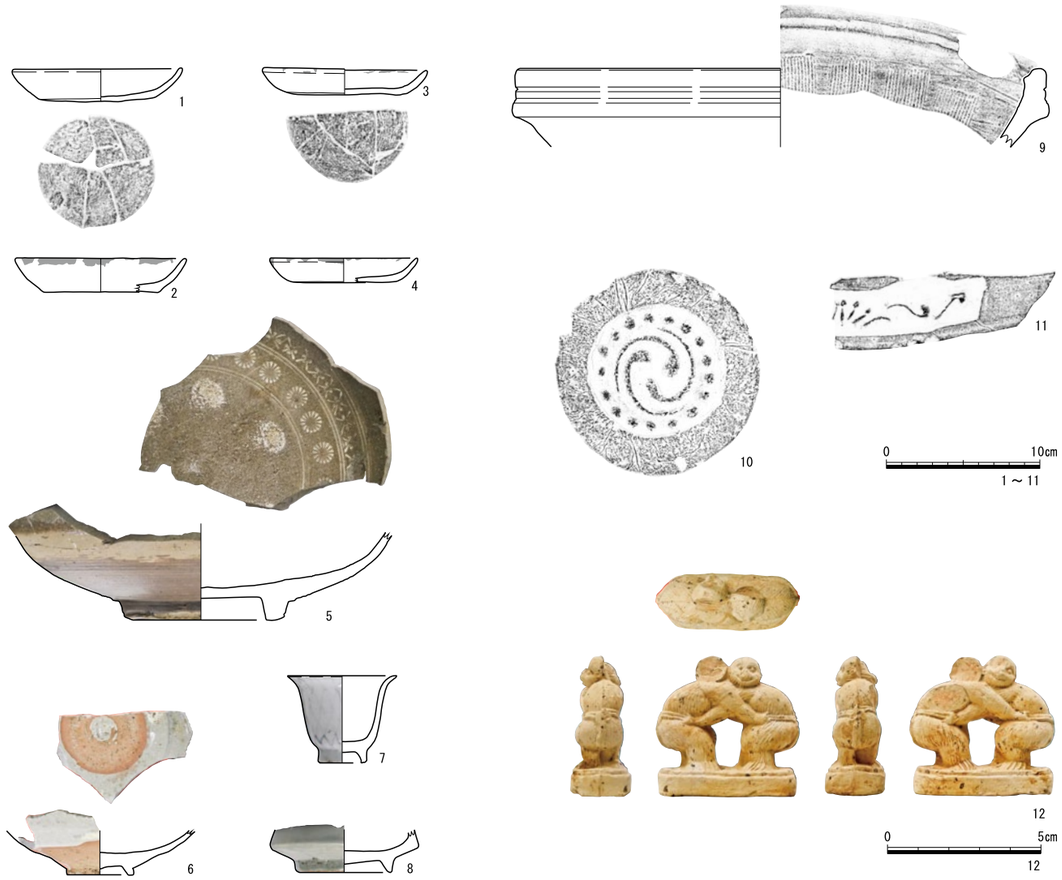
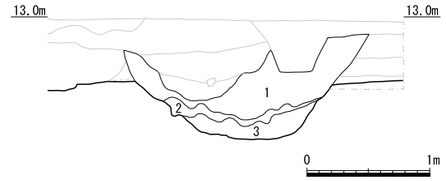
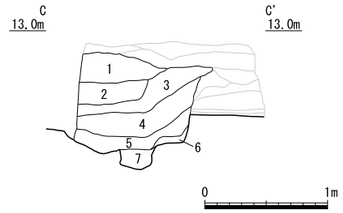


図9　SD02出土遺物（S=1:4、1:2）



1. 2.5Y6/3 粘質土層：細砂。しまりやや弱、粘性やや弱。黒色地山ブロックを多く含む。
2. 2.5Y7/1 粘質土層：シルト。しまり弱、粘性やや強。
3. 2.5Y7/1 粘質土層：シルト。しまり弱、粘性やや強。黄色・黒色地山ブロックを非常に多く含む。

図10　SD03平・断面図（S=1:100、1:50）



1. 10YR5/2粘質土層:極細砂。しまり弱､粘性弱。炭を多く含む。
2. 2.5Y6/2粘質土層:極細砂。しまり弱､粘性弱。旧耕土ブロックを多く含む。
3. 2.5Y5/4 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、粘性やや弱。炭含む。
4. 2.5Y5/3 粘質土層：細砂。しまりやや弱、粘性やや弱。炭を含む。土師器皿細片を多く包含する。
5. 2.5Y6/2 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、粘性やや弱。旧耕土・黒色地山ブロックを含む。
6. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、粘性やや弱。旧耕土ブロックを多く含む。
7. 2.5Y7/1 粘質土層：極細砂。しまりやや弱、粘性やや弱。

図11　SK12断面図（S=1:50）

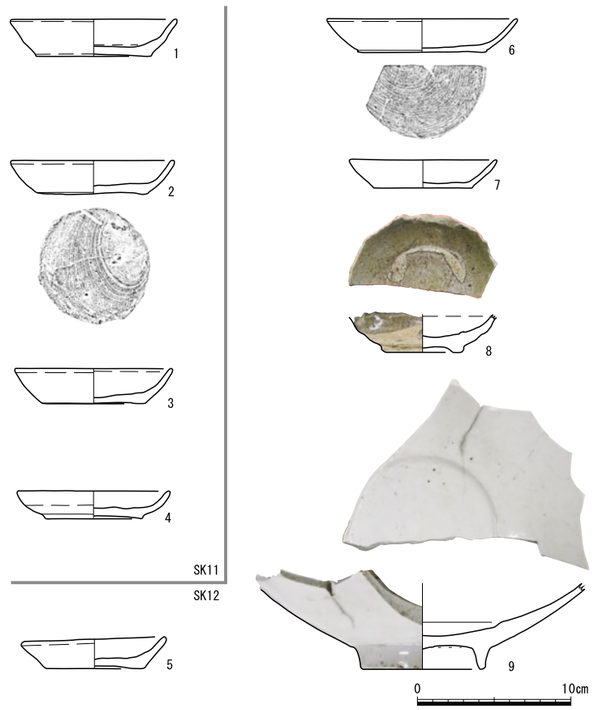


図12　SK11・SK12出土遺物（S=1:4）

写真1　調査区東半全景（西から）

写真2　調査区西半全景（西から）

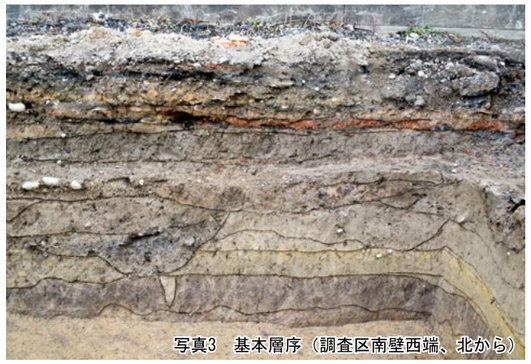


写真3　基本層序（調査区南壁西端、北から）

写真4　列石（北から）

写真5　SA02（西から）

写真6　SA02-P6（北から）

写真7　SA02-P9（北から）

写真8　SA02-P10（北西から）

写真9　SA02-P2（北から）

写真10　SA02（東から）

写真11　SA02東端（東から）

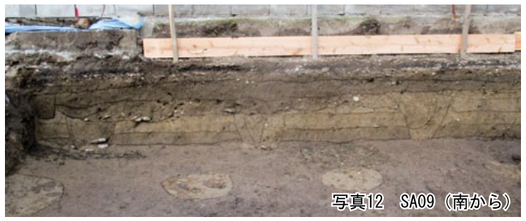


写真12　SA09（南から）

写真13　SA08とSA02（南西から）

写真14　SA08-P2（南から）

写真15　SA08-P3（南から）

写真16　SA08-P5（南から）

写真17　SD02（南から）

写真18　SD02-AA’断面（南から）

写真19　SD02-BB’断面（南から）

写真20　SD03（南から）

写真21　SD03（南から）

写真22　SK12（西から）

写真23　SK11（南西から）

写真24　SE01（北から）

写真25　SE02（東から）

写真26　SE02（南西から）

写真27　SE03（北東から）

写真28　SE03（東から）

写真29　SK10礫出土状況（南から）

写真30　SK10（北から）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひめじじょうじょうかまちあと
書 名	姫路城城下町跡
副 書 名	姫路城跡第349次発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第45集
編 著 者 名	黒田　祐介
編 集 機 関	姫路市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発 行 年 月 日	平成29年（2017年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	姫路市北条口五丁目41番（ひめじしほうじょうぐち）	28201	020169	34°49′48″	134°42′00″	2016.1.15～2016.2.20	219.4㎡	共同住宅建設	2015 0430

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	掘立柱列 溝 土坑 井戸	陶磁器 瓦 土師器 土人形

要約

姫路城跡外曲輪南東部において発掘調査を実施した。調査地は寺院や武家屋敷地として利用されており、各時期の絵図からその変遷を追うことができる。
発掘調査の結果、塀の可能性がある掘立柱列や溝、土坑、井戸などを確認した。調査地が狭小のため、断定はできないものの、絵図の記載と遺構を結びつけることで、寺院や武家屋敷地に伴う境界に関連する可能性がある遺構を示すことができた。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第45集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第349次発掘調査報告書―

平成29年（2017年）年3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2